

アフターケア通信

ご本尊を受けとられた貴方へ

神事と仏事

【10月号】



【「神」への畏れ】

そのような神々を怒らせたならば、天変地異が起こり、あるいは疫病（えきびょう）に襲われるのではないかという危惧（きぐ）があるため、神々を祀るといふ託宣が「祭り」となり、全国各地に伝わってきたのです。

こうして日本人は、「神々のお陰である」と感謝しつつも、「神々の祟り（たたり）」を畏れおののき、深く縛られていたのです。

【「畏れ」からの解放 —親鸞聖人の視点】

親鸞聖人は、法然上人の教えを受け継ぎ、念佛者は現生において十種類の利益（りやく）を得ることを説いています。その第一に、「冥衆護持の益（みょうしゅうごじのやく）」を挙げられています。「冥衆」、つまり目には見えない諸天・諸神、そして悪鬼神までも念佛者を守護してくれるのであると、明らかにしたのです。

また、『歎異抄（たんにしょう）』にあるように、「信心の行者には、天神地祇（てんじんじぎ）も敬伏（きょうぶく）し、魔界（まかい）外道（げどう）も障碍（しょうげ）することなし」とまで宣言し、神々の畏れや祟りに苦しむ民衆を、その霊の呪縛から解放していったのでした。

真宗大谷派 長崎教区教化委員会

【日本人の神に対する信仰と「神道」】

日本人の神々に対する信仰は、万物に靈魂や精霊が宿る（アニミズム）として畏（おそれ）おののき、それを崇（あが）め祀（まつ）ることに始まっています。それは、「八百万（やおよそ）の神々」と呼ばれるように、人々に恩恵をもたらしてくれる自然現象から動・植物、ひいては先祖の霊まで神として信仰してきたのです。

これはやがてシャーマニズム、つまり巫女（みこ）などが神のお告げを聞き、神の代理としてその意志を告げ知らせる託宣（たくせん）を行う宗教として、役割を担うことになりました。それが「神道」の始まりです。

今月の門徒さん

長崎という土地は、日常生活の中に、仏教・神道・キリスト教が混在する環境にあります。そこで生まれ育った私は、この環境を違和感を持たずに受け入れてきました。あらためて、神事と仏事を考えると、神事は教義がなく、自然と融合することで、五穀豊穰等を願い自分たちの生活の安寧を祈願するものだと考えます。

仏事は、教義に則る生活をし、先祖を敬い、自分の生き方について見つめ直し、来世を信じることで現世（今）の安寧を願うといえます。何事も合理主義にある現代日本にとって、仏事を大切にすることは、人の生き方を見つめ直すきっかけになると考えます。

みぞがみてる き

溝上輝幸さん

（第1組 照護寺）





葬儀について



こころえ ちょうもん ”心得と聴聞“

真宗の通夜・葬儀は、亡き人に対する単なるお見送りの儀式だけでなく、愛別離苦の悲しみを経験して、初めてうなずける教えや世界があることが願われて勤められています。



我々は、親しき人、愛する人を亡くすと、言いようのない喪失感が心に生じ、ポツカリと心の中に空洞がくうどうできます。現代人はその心の穴に、いあん慰安や気ばらしを入れ込もうとしますが、なかなか埋め尽くすことはできません。

しかし、ちょうもん仏法を聴聞すると、しだいに、この穴は仏法を聞くための御縁だったとうなずけるのです。すると、亡き人から仏法を聞く耳をいただき、彼岸の浄土を感得する心^{ひがん}をいただいたと拝めることでしょう。



昭和十五年ごろの葬儀の様子(福田地区)